

# 初期中観派の注釈書について

——『青目註』と ABh の異同をめぐって——

安井光洋

## 0. はじめに

*Mūlamadhyamakakārikā*（以下 MMK）は Nāgārjuna の主要著作であり、本発表において用いる *Akutobhaya*（以下 ABh）と青目釈『中論』（以下『青目註』）はその注釈書である。ABh はチベット訳のみが現存しており、『青目註』は鳩摩羅什による漢訳のみが伝わっている。

この2つの注釈書は数多く存在する MMK 注釈書群の中でも、特にその内容に類似点多く見受けられる注釈書であり、これについては「元々は同一のテキストだったのではないか」という説<sup>1)</sup>をはじめとして、先学によって広く検討されているが未だ明確な結論を得るに至っていない。

よって本発表においてはこの2注釈書の中から第1章「縁の考察」における注釈の特徴的な点を比較することで、その異同関係について考察し、さらに MMK 解釈としてどのような差異が生じるかについて検討した。

## 1. 『青目註』と ABh の相違点

まず、『青目註』は上述のように ABh との類似が指摘される一方で、羅什による本文の意識と加筆が指摘されており、これについては『青目註』の冒頭に付された羅什の弟子である僧叡の序文に「乖闕煩重者。法師皆裁而裨之。」<sup>2)</sup>とあることから明らかである。

ここで問題となるのは、羅什によって意識、加筆されている箇所をどのように判別するかである。さらにこれについては、漢訳される前の『青目註』がより ABh に近い内容であったという可能性も考えられる。しかし、その近似性がどの程度のものであったかを正確に知ることは極めて困難である。そのため、ABh との相違点すべてをとりもなおさず羅什による意識と判断してしまうのは早計であるように思われる。よって、本発表においては羅什による意識という観点から ABh との比較も交えて考察を行った。

今回、例として用いたのは MMK 第1章の第4偈から第6偈である。この3つの偈では前の第3偈で示された「四縁から生起する」という反論に対して、この「四

縁からの生起」を総合的に批判している。また、この後の第7偈から第10偈の4つの偈では四縁の一つ一つを個別に批判するという構成になっている。

この第4偈から第6偈は偈の漢訳に、サンスクリットやチベット語訳には見られない特徴的な差異が見られることから、サンスクリット、チベット、漢訳の3種を挙げて、漢訳の相違点を中心に論じた。

これらの偈を比較すると、まず第4偈にある *kriyā* という語がチベット語訳では *bya ba*、とされているのに対し、漢訳では「果」と訳されている。この「果」という訳語は続く第5偈でも見受けられるが、こちらではサンスクリット、チベット語訳ともこれに該当する語が見受けられない。そして第6偈では *artha* がチベット語訳では *don* と訳されており、漢訳ではやはり「果」と訳されている。

これについて、*kriyā* を *bya ba*、*artha* を *don* とするチベット語訳は適切であると思われるが、*kriyā* も *artha* も「果」と訳す漢訳についてはあまり妥当ではないように思われる。また、第1章では上記の3偈の他に第7偈と第9偈で *dharma* という語がチベット語訳では *chos* と訳されているのに対し、漢訳ではやはり「果」と訳されている。

一方、この「果」にあたる語がサンスクリットやチベット語訳で出てくるのは、第1章では第11偈以降からであり、ここでは *phala*（結果）という語が用いられ、チベット語では *'bras bu* と訳されている。そして、漢訳ではこの *phala* も同様に「果」と訳されている。最終的に羅什の訳では第1章全14偈のうち9偈で「果」という訳語が用いられており、そのうち5つがサンスクリットにもチベット語訳にも対応しない意識と思われるものである。

その中でも特に、第5偈では注釈が羅什による偈の意識に基づいた内容となっており、それゆえこの注釈は原典の著者である青目ではなく、訳者である羅什の筆によるものであると考えられる。

これに対して ABh は、第4偈で *kriyā* を *bya ba* と訳していることから、この偈を縁と作用の関係性に対

して批判を行う偈として位置付けており、注釈もこれに則した解釈をしている。このような解釈は第4偈で「果」という意識を用いる『青目註』では不可能である。

これによって『青目註』における羅什の意識は彼の意図に沿って論旨を明瞭にするという効果がある一方で、Nāgārjuna 自身が MMK において行おうとした考察からは離れてしまうという可能性があることがわかる。

このように羅什による『青目註』の意識、加筆は必ずしも『青目註』の説かんとしている内容をより深め、向上させるばかりではなく、「乖闕煩重」という訳者の主観的な判断によって『青目註』本来、さらには MMK 本来の解釈を取りこぼしているという側面もある。それゆえ、そのような場合には ABh の方が MMK に忠実な解釈であるということになり、今回挙げた箇所はそれを示す一例であると言える。

## 2. 結語

以上、『青目註』と ABh について類似点と相違点という2点から両注釈書の内容を検討した。類似点の考察によりこの両注釈書が他の注釈書以上に互いに近似したものであることがわかり、相違点については羅什による加筆とその影響が考察の対象として明らかになった。しかし、羅什による加筆以外の相違の可能性など検討すべき問題はまだまだ多く残っている。これについては当然のことながら第1章以外の章も含めた、より広い範囲での検証が不可欠であるのは言うまでもない。今回は第1章という一つの文脈の中で両注釈書の間類似点と相違点が併存していることをきっかけとして考察の一例を示した。

## 註

1) 丹治 [1982]

2) 大正蔵 vol.30 p.1a

(大学院仏教学研究科博士後期課程仏教学専攻)